パターン・ランゲージで理解する教育実践コミュニティ
――MOST フェローシッププログラムを事例として――

長田尚子（立命館大学） デイヴィス恵美（大阪成蹊大学）髙尾郁子（京都薬科大学）
神崎秀嗣（秀明大学）田中浩朗（東京電機大学）

概要：教育改善を志向する大学教員の実践コミュニティにおける思考や行動を、27 個のパターンに体系化した。各パターンは、実践コミュニティの参加者の立場からまとめられている。その検討過程において、コミュニティの設計者のパターンと、コミュニティが支える授業改善に関するパターンという新しい体系への発展が認識された。本稿では新しい体系の展開についての議論の過程と想定する全体像を示した。
キーワード：パターン・ランゲージ　大学教員　教育改善　実践コミュニティ　体系の発展

1. MOST フェローシッププログラムの概要

本研究では、教育実践を通じた大学教員の学び合いである相互研修型 FD（Faculty Development）の機会として、京都大学高等教育研究開発推進センターが提供した MOST（Mutual Online System for Teaching and Learning）フェローシッププログラム[1]から発展した実践コミュニティを事例とする。本稿では、その実践コミュニティの参加者が、実践を通じた学び合いのあり方をまとめたパターン・ランゲージを検討対象とする。

2012 年度に開始された MOST フェローシッププログラムでは、全国から選抜された約 10 名のフェローが相互に学び合いながら各自の授業実践をフィールドに授業改善に取り組む。1 年間の活動の中では、オンライン交流会や夏合宿等の機会を通じて活動プロセスを共有しながら授業改善の成果をコースポートフォリオにまとめて公開し、年度末に開催される大学教育研究フォーラムで発表する（田口, 2019）。プログラムは 1 年単位だが、修了後も活動に継続参加する教員が多く、日頃の交流に加えて夏合宿や共同研究を行う等（MOST フェロー, 2023）、実践コミュニティ（Wenger et al., 2002）としての活動が継続している[2]。筆者らは MOST フェローシッププログラムの修了生であり、実践コミュニティ（以下、MOST コミュニティ）の一員である。

2. パターン・ランゲージの開発

各大学で FD に関する様々な取り組みが進む中、FD の活性化に向けて、教員による実践コミュニティの存在とその働きに注目があたっている。FD プログラムの運営者らは、教育改善を目的とした実践コミュニティをどのように形成・維持・運営していくのか、核となる人材をどのように育成していくのか等を課題としてあげている（例：井上ほか, 2021）。MOST コミュニティでは、多様な大学と分野から経験年数も様々な教員が集まり、教育実践に取り組む姿勢や教育改善に向けた活動を共有し、10 年以上も学び合いを深めてきた。貴重な事例である MOST コミュニティを深く知りたいと考えた筆者らを中心とする有志が、2021 年度からパターン・ランゲージの開発を始めた（長田ほか, 2021）。開発の初期には、このパターン・ランゲージを誰がどのように利用するのかという点が議論となった。議論を通じて、他のコミュニティの参考にしてもらうことを意識するよりも、MOST コミュニティの良さの本質を捉えることが肝要であることを確認し、この点を大切に開発を進めた。初版を 2023 年 3 月に公開した（長田ほか, 2022; 長田ほか, 2023）。

本稿では、公開したパターン・ランゲージの概要を紹介した上で、初版のパターン・ランゲージの体系をさらに深め展開していくことに関する主な論点と今後の方向性について考察を深める。

3. 公開したパターン・ランゲージの概要

公開したパターン・ランゲージは「教育に情熱を注ぐ大学教員を後押しするコミュニティのことば」という名前で、現在は図 1 に示す全体像のように、27 パターン 9 カテゴリーで構成されている。

カテゴリーの A と B は MOST コミュニティの特徴を表すパターン、カテゴリーの C から E は各自の考え方や行動に関するパターン、カテゴリーの F から H は関係づくりに関するパターンとなっている。カテゴリーの P にはコミュニティの設計者の振る舞いをまとめている。

個々のパターンの構成は、冊子見開きを想定して、左

図 1　パターン・ランゲージの全体像（長田ほか, 2023）

図 2 「本質的なことを最優先」（カード形式）

ページにパターン名・イラスト・導入文、右ページに Context、Problem、Solution、Actions、Consequence を示している。以下本稿では紙幅の関係上、カード形式にまとめたものを用いて関連パターンを示す。全文の詳細は参考文献に示した長田ほか（2023）を参照されたい。

これらのパターンについては、開発期間中を通じて、MOST コミュニティのメンバーが集まる機会に報告を行ってきた。初版公開後は、コミュニティの設計者との意見交換、MOST コミュニティの合宿でのワークショップ（MOST フェロー, 2023）の機会等を通じて、メンバーから意見をもらい、内容に関する振り返りを継続している。

4. パターン・ランゲージ開発を通じた議論の展開

次に、ここまでの開発活動と振り返りを通じて、MOST コミュニティという実践コミュニティに関してパターン・ランゲージに関わって提起された論点を、実際のパターンと照らし合わせながら考察する。

(1) 状態の記述から思考や行動の記述へ

今回の開発に際しては、専門や経験年数が異なる 9 名のプログラム修了者にインタビューを行った。その中で「MOST コミュニティはフラットである」という言及が多いことが認識された。パターンはよい質の実践を生み出している人のコツを言葉でまとめるものであるが（井庭, 2023）、フラットであるということは、状態を指す表現であるため、どのように思考や行動の言葉で記述するのかについて模索が続いた。その結果まとめられたパターンが、カテゴリーA〈コミュニティとしての姿〉の中にある「本質的なことを最優先」である（図 2）。この「本質的なことを最優先」というパターンでは、フラットだからこそ互いの関係性に縛られず、相手に敬意を払い、相手のために何が重要かを考えて意見を述べたり行動したりすることが重要であることが、インタビュー内容も踏まえて記述された。結果としては、本質的な助言を受けた経験は感謝の気持ちとして記憶に残り、こうした経験を得た人が同じ行動をコミュニティの中に生み出そうとするため、よい環境の連鎖が生み出されていることがまとめられた。

一方で、そもそもこうした思考や行動のあり方を様々な方法で参加者に示したのは、MOST コミュニティのもとである MOST フェローシッププログラムの設計者であったはずであり、コミュニティの設計者をパターン・ランゲージでどのように表現すべきか、ということが次なる論点となった。

(2) コミュニティの設計者のパターン

筆者らは開発過程の議論において、コミュニティの設計者という表現を用いていたため、本稿でも設計者という表現を用いているが、実践コミュニティは設計したらその通りに形成されるというものではない。Wenger et al.（2002）が、「実践コミュニティを設計、育成するということは、その活動を計画、指揮、組織化するというよりはむしろ、参加を誘発し、促すことに近い」と述べているように、設計者はプログラムの運営にあたりながら、

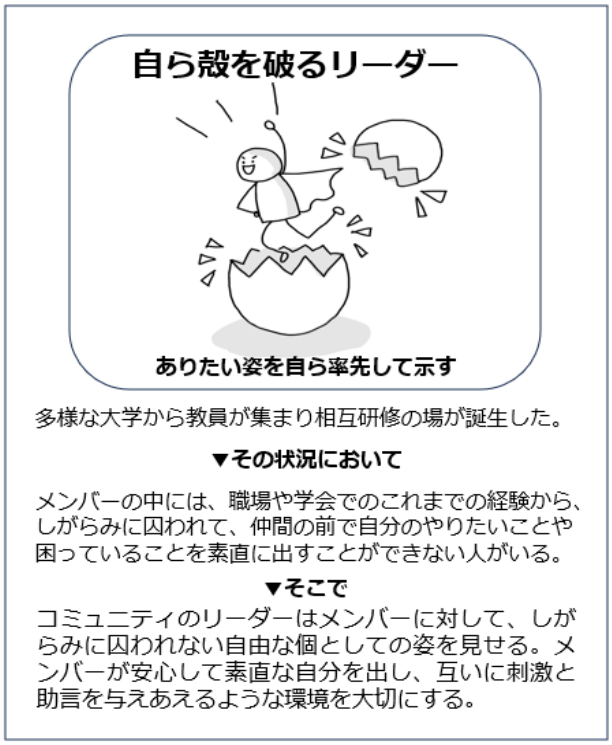

図3 「自ら殻を破るリーダー」（カード形式）

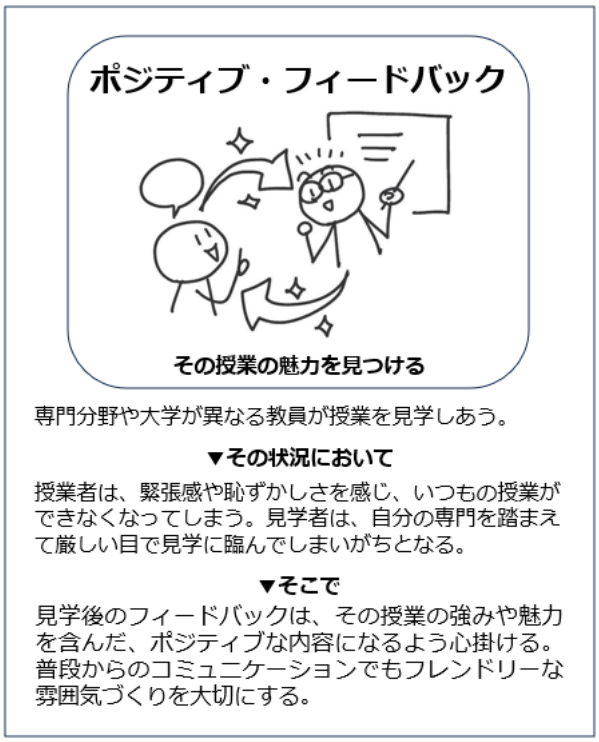

図4 「ポジティブ・フィードバック」（カード形式）

参加者に何らかの働きかけをしていたことが想定できる。

そこで、設計者の振る舞いを改めて振り返り、パターンとして記述したものを、カテゴリーP〈コミュニティの育ての親〉の中にまとめることとした[3)]。その中の1つが「自ら殻を破るリーダー」というパターンである（図3）。このパターンでは、暗黙的な前提や多様なしがらみに囚われずに、自由な個としての姿を示してくれるリーダーの振る舞いをまとめている。このようなリーダーの姿は、Wenger et al.（2002）が示したように、コミュニティに集まってくるメンバーへの参加の誘発や促しになっていると考えられる。これ以外に何か特徴的な思考や行動が実践コミュニティへの働きかけになっていることも考えられるため、コミュニティの設計者らに図1に示した全体像を見てもらいながら、気になるパターンを中心に意見交換するセッションを行い、追加パターンのマイニングを開始した。

現在カテゴリーPは3パターンから構成され、図1に示した全体像の中に含まれている。その後、コミュニティの設計者による働きかけに関するパターンのマイニングが進み、いくつかの新しいパターンの種が見出されている。これらも含め、実践コミュニティを生み出すことにつながった思考や行動の体系としてまとめていく予定である。本稿で用いてきた設計者という表現についても、追加のパターンの検討を通じてコミュニティを設計するという概念の解釈を深めていく。

(3) コミュニティが支える授業改善

相互研修型FDの機会としてのMOSTフェローシッププログラムは、フェローとして参加する教員のネットワーキングの機会を提供して大学横断的な学び合いを実現し、ここから実践コミュニティとしてのMOSTコミュニティが形成されてきた。一方で、MOSTコミュニティへの参加者は、それぞれの所属機関で授業を行うため、最終的な授業改善は各自の現場での取り組みとなる。このような実践コミュニティと所属する組織との関係性をWenger et al.（2002）は、「二重編み」と表現し、両者の連携の重要性を示唆している。この点を踏まえると、MOSTコミュニティの活動を通じて得た知識や経験を、参加者各自の所属機関での授業改善につなげるための思考や行動があり、そこから継続的な教育改善が実現していくのではないかと考えることができる。つまり、そのコツをパターンとして掘り起こせる可能性がある。

現在このような問題意識から、コミュニティが支える授業改善を念頭に、パターンのマイニングを進めている。ここまでにまとめられた約20個のパターンの種から、〈授業との向き合い方〉〈学生との向き合い方〉〈現場での関係づくり〉〈授業公開・見学のあり方〉〈学びつづける姿勢〉といったカテゴリーの存在が見えてきている。

図4は、MOSTコミュニティにおけるオンラインでの授業公開・見学の考え方や参加者のフィードバックから生まれたパターン「ポジティブ・フィードバック」であ

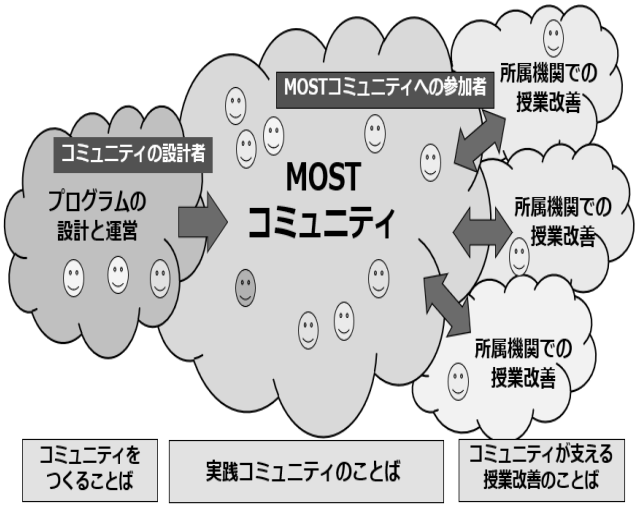

図 5 実践コミュニティの発展とパターン・ランゲージの仮説的な全体像

る。相互研修型 FD では、お互いの授業実践や授業改善のプロセスを公開し学び合うことを大切にしているが、その際のフィードバックのあり方として、対象とする授業の特長を見つけるつもりで、ポジティブなコメントをすることが示されている。こうしたコメントのやりとりが、創造的な授業改善への動機付けにもなる。このような考え方は、図 1 に示した MOST コミュニティにおける思考や行動を示したパターン・ランゲージの全体像の中にも、例えばカテゴリーA〈コミュニティの姿〉の「肯定の文化」等、いくつか含まれており、MOST コミュニティに参加していることが、現場で授業改善を進める基本的な考え方の素地になっていることがわかる。木村ほか（2021）によれば、ポジティブ・フィードバックを前提に開催されるオンライン授業見学では、授業公開者だけでなく、授業参観者側にも前向きな変化が起こりうることが示唆されている。

5. まとめ

本稿では、「教育に情熱を注ぐ大学教員を後押しするコミュニティのことば」という名前で公開したパターン・ランゲージを骨格として用い、実践コミュニティとしての MOST コミュニティを中心に実践の全体像について検討した。考察を通じて、コミュニティの設計者による振る舞いが参加を誘発し、実践コミュニティでの活動が生み出され、そこで得た知識や経験が各自の授業改善の現場で活かされるという流れの存在が示唆された。図 5 に示したものは、MOST コミュニティを核とした実践の展開とパターン・ランゲージの仮説的な全体像である。コミュニティの設計者は、MOST フェローシッププログラムを設計し運営することを通じて、参加者に様々な働きかけを行ってきた。そこから教育改善で必要な理念やコミュニティのあり方を感じ取った参加者たちにより、MOST コミュニティの活動が始まった。さらに、そこでの経験が、各自の所属機関での日々の授業や授業改善に反映されていく。現在筆者らは、これらを支えている型として、「コミュニティをつくることば」「実践コミュニティのことば」「コミュニティが支える授業改善のことば」というパターン・ランゲージの柔らかな体系の存在を想定している。パターン・ランゲージの開発には、ある領域に関してインタビューを行い限定された範囲で理論化することを通じて、現場の理解や課題解決に活かすことを志向する質的研究に相当する働きもあると考えられる。

MOST コミュニティにおけるパターン・ランゲージの開発は、今後も継続する。この開発活動は、パターンが完成したら終わりというものではなく、実践コミュニティの中で、その実践コミュニティに関する理解を深めつつ、参加者相互のコミュニケーションを生み出す形で続くものと考えている。本稿で紹介した MOST コミュニティにおけるパターン・ランゲージのように、現場の当事者が現場の理解を深めるためにパターン・ランゲージを開発するということは、実践コミュニティの意義の理解を促進し活動を活性化することにもつながるだろう。

最後に本研究の今後の課題をあげておく。ダイナミックに変化する MOST コミュニティの実践の体系として、仮説的に示した全体像の中に存在するパターンの種から、パターンを完成し、MOST コミュニティを核としたパターン・ランゲージの全体像を進化させることである。その際には、ここまであまり意識できていなかったパターン・ランゲージの利用者や利用場面を念頭に置き、本研究で開発したパターン・ランゲージの活用を進めるためのワークショップの開発も検討したい。それに加えて、開発したパターン・ランゲージの検証を行い、記述内容や体系に関する継続的な改善の方法を探究したいと考えている。

注

1） MOST フェローシッププログラムは、CASTL（Carnegie Academy for the Scholarship of Teaching and Learning）というカーネギー財団のフェローシッププログラムを参考に設計されている。飯吉（2011）によれば、CASTL に参加したフェローは「自らの教育実践の改善に積極的に取り組み、大学や学問分野の違いを越えて、その教育実践研究の目的・過程・成果を共有する」ことに携わった。飯吉（2011）はこうした取り

組みを支援するテクノロジーの重要性とともに、互いの教育実践から学び合い高め合うことに動機づけられたコミュニティの形成が課題であることを示した。

2）京都大学高等教育研究開発推進センターは 2022 年 9 月末で廃止されたが、MOST フェローの活動は継続している。同センターの廃止にともなって、10 期に及んだ MOST フェローシッププログラムの成果が公開されていた京都大学の Web サイトの関連ページが閉鎖され、各フェローの授業改善の成果をまとめたコースポートフォリオが掲載されていた MOST というオンライン環境も閉鎖された。現在コースポートフォリオは、参考文献に示した MOST Fellowship Web（MOST フェロー, 2023）にアーカイブされ、その後の活動とともに公開されている。

3）P は親を示す英単語である parent の頭文字をとったものである。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 22H01024 の助成を受けている。パターン・ランゲージの開発に際し、ご協力・ご支援をいただいた皆様、MOST コミュニティの皆様に深く感謝する。勝又あずさ先生、坂本洋子先生には、開発段階から本稿での考察までつながる貴重な示唆をいただいた。カードの制作に関しては、株式会社クリエイティブシフトの阿部有里氏に助言をいただいた。イラストの制作に関しては、株式会社 TAM の日高由美子氏に支援をいただいた。AsianPLoP2024 のシェパーディングの機会を通じて日置和暉氏から貴重なフィードバックをいただいた。AsianPLoP2024 のライターズ・ワークショップでは、ファシリテートして下さった木村紀彦氏とご参加いただいた皆様から、多くのコメントと MOST コミュニティのパターン・ランゲージの発展に向けて励ましの言葉をいただくことができた。ここに記して深く感謝する。

参考文献

井庭崇編（2013）『パターン・ランゲージ 創造的な未来をつくるための言語』慶応義塾大学出版会.

井庭崇（2023）「新しい方法，新しい学問，そして，未来をつくる―創造実践学の創造」桑原武夫・清水唯一朗編『総合政策学の方法論的展開』慶應義塾大学出版会, pp.67-86.

飯吉透　（2011）「テクノロジー支援による Scholarship of Teaching and Learning の推進」京都大学高等教育研究開発推進センター編『大学教育のネットワークを創る』東信堂，pp.86-106.

井上史子・安岡高志・小笠原正明・三尾忠男・大串晃弘（2021）「SoTL における「実践コミュニティ」の意義と役割を考える」『大学教育学会誌』43(2), 104-108.

木村修平・近藤雪絵・神谷健一・坂本洋子・神崎秀嗣・長谷川元洋（2021）「オンライン授業の相互見学による大学横断型 FD の可能性と課題」『2021 PC Conference 2021 論文集』111-115.

MOST フェロー（2023）『MOST Fellowship Web』（https://mostf.pep-rg.jp/）（2024 年 4 月 4 日閲覧）

長田尚子・デイヴィス恵美・神崎秀嗣・町田小織・髙尾郁子・田中浩朗（2021）「越境的教育実践コミュニティにおける パターン・ランゲージ開発の試み」『日本教育工学会研究報告集』2021(4), 33-40.

長田尚子・デイヴィス恵美・髙尾郁子・神崎秀嗣・田中浩朗（2022）「パターン・ランゲージの開発を通じた相互研修型 FD の実践コミュニティに関する事例検討」『日本教育工学会研究報告集』2022(3), 34-41.

長田尚子・デイヴィス恵美・神崎秀嗣・町田小織・髙尾郁子・田中浩朗（2023）「教育に情熱を注ぐ大学教員を後押しするコミュニティのことば」『MOST Fellowship Web』研究紹介 MOST パターン・ランゲージの会（https://mostf.pep-rg.jp/researches/researchgroup1）（2024 年 4 月 4 日閲覧）

田口真奈（2019）「FD としての授業研究」吉崎静夫監修・村川雅弘・木原敏行編著『授業研究のフロンティア』ミネルヴァ書房, pp.64-77.

Wenger, E., McDermott, R., & Snyder, W. (2002). *Cultivating Communities of Practice.* Harvard Business School Press.（野村恭彦監修，櫻井祐子訳）（2002）『コミュニティ・オブ・プラクティス ― ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社.